大血管転位症手術予後調査

大阪大学第一外科　川　島　康　生
秦　石　賢

1976年以前のTGA症例中，遠隔期生存例は9例である。そのうち，遠隔死亡1例を除く8例にアンケートを発送し，全例より回答を得た。手術時年令は7ヵ月～7才，平均2才1ヵ月。調査時年令は3才4ヵ月～15才2ヵ月，平均6才4ヵ月。術後追跡期間は，2年7ヵ月～7年6ヵ月，平均4年2ヵ月であった。男5例，女3例。Mustard 分類では，Ⅰ型5例，Ⅱ型2例，Ⅲ型1例。Ⅰ型，Ⅲ例は全例Mustard手術を行い，Ⅲ型ではVSD閉鎖，PS除去を行った。Ⅱ型の2例中，1例は，高肺血管抵抗の為，Palliative Mustard 手術を行い，他の1例には，Jatene 手術を行った。Mustard 手術時，baffle は心外膜を使用，又，冠静脈洞は，2例で，機能的右房に，5例で，機能的左房に，開口せしめた。

8例中1例で，下大静脈脱血管挿入部，及び，その近傍の baffle の狭窄の為，下大静脈還流障害をきたし，術後4ヵ月目に再手術を施行。その後は，順調に経過した。又，今回アンケートを発送しなかった。遠隔死亡例1例は，baffle の狭窄により，上大静脈還流障害をきたし，術後1年で死亡した例である。1例で Mustard 手術後，左肺静脈還流障害が疑われたが，特に臨床症状はない，2例で，術中長時間の循環停止，或いは，術後の心停止の為，術後脳障害をきたした。心電図では，術前，全例 Sinus rhyshm，遠隔時 Sinus rhyshm 7例 junctional rhyshm 1例と変化した。又，VSD を閉鎖した TGA Ⅱ型例1例で，術後 CRBBB を認めた。動脈血酸素飽和度（SaO_2）の変化をみると，BAS 施行例5例（Ⅰ型4例，Ⅱ型1例）では，BAS により，平均40.7%から55.7%と15%の上昇をみ，更に遠隔時には，92.3%と上昇した。BAS 非施行例2例（Ⅰ型1例，Ⅱ型1例）も含め，total 7例では，術前52.1%%より，術後91.9%と上昇した。Hb 値の変化では，術前，全例 15g/dl 以上，平均 18.5 g/dl より，遠隔時・全例 15 g/dl 以下，平均12.2 g/dl であった。

以下，アンケート結果をまとめると，次の如くである。体重，身長では，男子例2例を除く全例で，平均 ±2SD 以内にあり，発育はほぼ順調である。運動能力，チアノーゼは，全例，著明に改善された。又，知能の発達，或いは，精神的発育では，術後脳障害の2例を除き，順調である。NYHA 分類では，全例，術後 I° で，生活している。現在の症状では，8例中，症状なし－5例，症状あり－3例であった。その主な症状は，風邪にかかりやすいであった。手術の効果では8例中7例で，よくなったと答えた。退院後の病気で，血清肝炎は2例(25%)にみられた。退院後の治療薬では，全例，ジギタリス剤，利尿剤等は，服用してなかった。

完全大血管転位症 Mustard 手術の遠隔期成績

東京女子医科大学　心臓血圧研究所　高　尾　篤　良　　門　間　和　夫

完全大血管転位症の Mustard 手術後遠隔期予後は必ずしも良くなく，死亡例・各種の不整脈・心機能不全が報告されている。本法の遠隔期予後を知り，手術法を改善することを目的としてこの研究を行なった。

〈方　法〉

1969年より1976年に Mustard 法による心内修復手術を受け生存退院した完全大血管転位症20例を対象とし，入院・外来病歴と調査表郵送により，手術後2年―9年の状態を調査した。病型はⅠ型15例，Ⅱ型4例，Ⅲ型1例，手術年齢は3ヶ月ないし4歳，心房内 baffle は心外膜（15例）又は goretex（5例）を用い，Ⅱ，Ⅲ型では VSD を patch で閉鎖した。14例で手術後2週間な

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1976 年以前の TGA 症例中,遠隔期生存例は 9 例である。そのうち,遠隔死亡 1 例を除く 8 例にアンケートを発送し,全例より回答を得た。手術時年令ほ 7 ヵ月〜7 才,平均 2 才 1 ヵ月。調査時年令は 3 才 4 ヵ月〜15 才 2 ヵ月,平均 6 才 4 ヵ月。術後追跡期間ほ,2 年 7 ヵ月〜7 年 6 ヵ月,平均 4 年 2 ヵ月であった。